

ような内容をもった概念であろうか。animism という用語は、イギリスの民族学者である E. B. Tylor が著した *Primitive Culture* (一八七二、一九七四再版) に出てくるもので、彼の造語といわれている。タイラーはアニミズムを次のように考えていた…霊的存在者 (spiritual beings) を信じるのが理論であり、それらを崇拜することが実践であるような、古代から続き全世界に広まっている宗教哲学である。また、アニミズムが高度な文明領域に到達する筋道を明らかにするという、自然宗教の発達 (developments) について考えていた。タイラーが考えた自然宗教の発達—宗教民族学では宗教発展段階論とか宗教進化論を指す—とは、アニミズムに始まった自然宗教が、精霊信仰から自然神崇拜や多神教に発達し、最終的に一神教に至るという考えである。さて、ここからはジャイナ教がアニミズムではないことを述べ、その生物観に言及したい。先ず最初に述べることは、ジャイナ教は創造神、絶対神を認めていないことである。したがって一神教の神がこのような神であるのなら、その対極にあるアニミズムの霊的存在者を信じるあり方も、それらを崇拜するあり方も、ジャイナ教にはない。人間を動物に含んでいる六生類は、世界 (loka) に存在したし、今も存在している。地、水、火、風、草木穀物のそれぞれの身体 of 各々の個体の一つずつ有している靈魂は、信じる対象でもなく崇拜の対象でもなく、生類同士が共に生きるための個体の主体であろう。

バイオリージョンの視点から見た日本の風土と信仰

永原 順子

バイオリージョン (Bioregion) とは、生物域、生態域などと訳され、国境などの境界で区切られない、ある一つの山系や、河川の流域などの生態的なつながりをもつ地域のことである。このような生態系のつながりを自覚し、復元しつつ、その生態系の一部として人間の生活を見直し、持続可能な生態域を目指そうとする活動がバイオリージョナリズムである。この活動は、世界各地、もちろん日本でも、近年活発に行われている。

このバイオリージョナリズムの実践者の一人であるゲリー・スナイダー氏 (一九三〇—) は、自然と人間との関係をテーマに多くの作品を書いた自然詩人としても有名である。氏は、一九五六年から一九六八年まで日本に滞在し、相国寺や大徳寺で臨済禅を学んだ。この時期に氏は能に没頭、中でも特に「山姥」という一つの曲から感銘を受け、「山姥」を題材とした詩を書くに至る。

能「山姥」では、都の遊女一行が善光寺参りの途中、一人の老女が住む庵で一夜の宿を借りるところから話が始まる。その老女は、自らが山姥であると告白し、自らの境遇と仏法の理を説いてやがて姿を消す。山姥は能の舞台に人の形をとって現れるが、その存在が表すのは、山すなわち生態系そのものである。そして山姥の存在が「邪正一如」「色即是空」を説いている。

以上、バイオリージョナリズムの実践者の一人が日本文化に触れ、そのうちの能、特に「山姥」に共鳴した、という事実は何を示唆するのか。

まずはじめに思いつくのは、「バイオリージョンなどという言葉で語られる前に、日本人は古来そういう思想を持っているのだ、何をいまさら。」という驕りと、それに対する「その思想を忘れてしまったからこそ、いまさら」ながら声高に言われているのだ。」という、灯台もと暗しのアイロニー、という構図である。これは、やはり温故知新だ、と簡単に解決できる問題ではない。能が日本の「伝統文化」として人々から遠い存在になってしまったこととも無関係ではあるまい。

次に、改めて自然と人間との関係を、今回の焦点である能「山姥」を入り口として見てみよう。能以外での山姥像は、金太郎の母という伝説もあるが、やはり人食いなどの恐ろしい存在であることが多い。それに対し能の「山姥」では、人々を助ける山姥の話が語られ、登場した山姥は仏法の哲理を説く。能では、人間がおそれる存在ではなく、「煩惱」や「妄執」について語り、むしろ人間に近いものとして位置づけられている。自然への姿勢として、一方的な畏れでもなく、かといって無理矢理支配するというのでもなく、対等に対話するありかたが見て取れる。この傾向は「山姥」だけではなく、他の多くの能で見られる。鬼神、竜神、精霊、あらゆるものが舞台に現れ、人間と、ひいては観客と対話する。無論、山姥が豹変するように自然は豹変する。人々は生活の営みの中で自然と対話し、対峙したからこそ、無常観、信仰心、恵みの享受、等々、様々なものを学んできたのだ。

また、あらゆるものが人の形をとって現れることを、昨年「擬人化」というテーマで述べたが、ほかによい言葉が見つかる

らなかったとはいえ、ここにも矛盾がある。「擬人」とは「人になぞらえる」という表現で、語句を弄するつもりはないが、今考えてみるとそこには人間からの一方的な視点が透けて見える。自然も語り、人も語る。その「場」を能は提供しているものであって、それ以上でもそれ以下でもない。シンポジウムでは「宗教の公益」がテーマであったが、その一つの鍵は、「宗教が、自然との対話のバランスをいかにしてとりもどせるのか」にあると考える。

崇り神としての放射能

——仮面の「一神教」と祀りの手筈——

實川 幹朗

東日本大震災を機に、私たちは「自然」との付き合いを問われている。近代では物質は、ハイデゲルの言う如く用材、人間の目的に合理的に配置、使役される道具と枠付けられる。しかし、巨大地震の力は人間の備えを打ち碎き、傲慢の設備に大量の放射性物質を撒き散らさせた。近代の身構えに落ち度が隠れているとの、教えではないか。

アメリカの社会学者リッツァーは、「効率性、計算可能性、予測可能性、制御」が、社会の「マクドナルド化」を進めているとした。しかしこれは、百年以上前にヴェーベルが述べたプロテスタンティズムの「目的合理性」に等しい。そして、「科学の条件」とされる「再現可能性」の言い換えでもある。近代の科学論は予測を要めとし、これで「自然」を支配、制御したがる。物質を人間の奴隷とすることが「科学的認識」なのである。